

お茶の水女子大学第4回年次大会

竹村和子教授追悼シンポジウム開催

去る2012年11月17日に、お茶の水女子大学英文学会第4回年次大会が開催されました。今回の大会では、2011年12月にご逝去された竹村和子先生を偲ぶ追悼シンポジウムが開かれました。

竹村和子先生はその生涯をかけてフェミニズム批評に取り組まれ、自身のフェミニズムを女子教育という形で実践された方でした。アメリカ文学研究をフェミニズム批評によって新たな地平へと導かれただけでなく、その批判的射程を文化研究、映画研究、ジェンダー・セクシュアリティ研究、ポストコロニアリズム理論、精神分析などへと広げていかれました。そして、こうした多岐にわたる研究領域を越境的／複合的に文学研究へと引き込みつつ、フェミニズム批評それ自体をも刷新し続けられました。同時に、この竹村先生の批評としてのフェミニズムの営みは、翻訳という仕事と切り離せないものです。竹村先生の翻訳とは、単なる日本語話者への英語文献の紹介ではなく、異なる言語の狭間でフェミニズム理論を新たに創出する批評行為そのものだったからです。さらに、このような批評理論の構築のみならず、竹村先生は本学の女子教育に対して並々ならぬ情熱を注がれました。本学で女子教育へと熱心に向かった姿勢は、自身のフェミニズムの実践という、現実に対する不屈の挑戦でもありました。

こうした竹村先生のフェミニズム批評における功績とその実践を振り返り、その遺産を本学の仲間たちや後輩たちへと継承していくための出発点となるべく企画されたこのシンポジウムでは、司会に一橋大学の越智博美先生、登壇者にお茶の水女子大学名誉教授海老根静江先生、獨協大学の上野直子先生、一橋大学の井川ちとせ先生、和洋女子大学の小林英里先生を迎え、「翻訳とフェミニズム」、「文学とフェミニズム」、「女子教育」の3つの観点から、竹村先生の生前の仕事がどのようなものであったかを確認し、そのうえで今後わたしたちがどのようにそれを引き継いでいくことができるのかについて、活発な討論が行われました。わたしたちの喪失感はいまだ大きく、悲しみが癒えることはありませんが、今回のシンポジウムは、竹村先生がその研究人生を通じて願い続けた「女同士の連帯」を、わたしたちが育み、発展させて行こうという強い思いを参加者で共有することによって、新しい始まりの場となったといえるでしょう。

2012年 竹村和子教授シンポジウム発起人 山口菜穂子